

Book Review 29-3 文学 #雪夢往来

『#雪夢往来』（木内昇著）を読んでみた。著者は出版社勤務を経て独立し、インタビュー誌「Spotting」を創刊。編集者・ライターとして活躍。『漂砂のうたう』で直木賞を受賞（のぼりと読み、女性作家である）。

本作の舞台は、2025年のNHK大河ドラマ「べらぼう」の主人公、蔦屋重三郎の死後まもない時代にあたるそうだ。雪国の風物や綺談を江戸の人々に教えたいと思い立ち、越後塩沢の縮仲買商・鈴木牧之が綴った雪話を40年かけて出版したという話である。

その時代に有名な作家の目に留まり、出版に動き始めるが板元や仲介者（作家山東京伝、弟・京山、滝沢馬琴）の事情に翻弄され続ける。私も本の名前だけ知っている『北越雪譜』。その出版までの長すぎる道のりを描いている。

江戸の人気戯作者が次々と登場し、当時の出版業界の内幕や人気戯作者のふるまいや性格が生々しく書き加えられている。京伝・京山兄弟と馬琴の確執が生々しい。十返舎一九も登場する。何年経過しても牧之の出版計画は全く進まず、京伝の弟が牧之へ協力を申し入れたが、馬琴が原稿を返却しないため、牧之は再度執筆する羽目になったようだ。

雪深いところで暮らす人の営みや風物等が江戸の庶民に受け入れられたとは驚いた。（私も1年と4カ月間勤務の関係で、越後魚沼で生活した。積雪は2階まで達した）。出版物のレベルが高く、価格が安くて、庶民の識字率も高かったのだ。

私がノンフィクションを読みたくなる心境に似ていたのだろうか。

『北越雪譜』は、江戸後期における越後魚沼の雪国の生活を活写した書籍。初編3巻、二編4巻の計2編7巻。著者は鈴木牧之。雪の結晶のスケッチから雪国の風俗・暮らし・方言・産業・奇譚まで雪国の諸相が、豊富な挿絵も交えて多角的かつ詳細に記されており、雪国百科事典ともいえるべき資料的価値を持つ。1837年に江戸で出版されると当時のベストセラー（700部）となった。

本書は全編を通して、雪国の生活が「暖国」ではまったく想像もつかないものであることを何度も強調している。好事家の目を引く珍しい風習・逸話が数多く載せられているが、この作品のテーマは雪国の奇習・奇譚を記録することにとどまらず、雪国の人々が雪との厳しい闘いに耐えながら生活していること、そして、郷土のそうした生活ぶりを暖国の人々へ知らせたい、という点に求められる。

以上の点から、本作品は雪国越後の貴重な民俗・方言・地理・産業史料と位置づけられている。この書の版元は幾度か変わったが、木版本は明治末年まで出版され、活字本は1936年岩波文庫から出版されている。